とある科学の森羅万象〈ホーリーエナジー〉

エルダー

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

とある科学の森羅万象〈ホーリーエナジー〉

【Ｎコード】

Ｎ８０３０Ｕ

【作者名】

エルダー

【あらすじ】

学園都市に住む風紀委員の小野寺翔太が風紀委員の仕事をしながら人間的に成長していくお話しです！（予定）

とある科学の超電磁砲の二次創作です　ご意見ご感想、誤字脱字募集中です！

《ｚｅｒｏ》　物語の始まり（前書き）

小説初心者ですよろしくお願いします！

《ｚｅｒｏ》　物語の始まり

場所《学園都市第７学区にあるとある研究施設》
時刻《２３：３１》
視点《第三者》

ここは学園都市にあるとある研究施設。そこ研究施設の長い地下通路を〈ある少年〉が走っていた。年齢は小学生くらいだろう。服装は病院の手術衣のようなものを着ていた。少年の表情は険しかった。しかし疲れている様子もなく息も乱れていない。すると角から警備ロボか二台現れ、電子的な声で『ケイコク！ケイコク！止マリナサイ！サモナケレバ射殺シマス！』と言い、上部に取り付けられた機関銃の照準を合わせようとする。走っている少年はそのままスピードを落とさず、素早く腰から二丁の黒い物体を取り出し、ダンッ！ダンッ！ダンッ！ダンッ！ダンッ！ダンッ！と６連射した。

拳銃である。それも〈Ｈ＆ａｍｐ；Ｋ　ＵＳＰ４５〉という拳銃である。この拳銃はドイツのＨ＆ａｍｐ；Ｋ社が開発したＵＳＰの４５口径モデルであり装弾数は１２＋１発。弾薬は〈４５ＡＣＰ弾〉という〈反動が大きく、威力が高い弾〉である。到底小学生くらいの少年がこの銃を扱える訳がない。なにせ大人でも４５ＡＣＰ弾の反動に難色を示すくらいである。しかしこの少年が放った６発の４５ＡＣＰ弾は吸い込まれるようにして警備ロボのセンサー部に次々当たり、警備ロボは機能を停止した。その警備ロボ横目にしてまた走る。出口が見えたところで少年はホッとした。さっきから何回も先のような警備ロボに遭遇していたため、残弾に心もとなかったのだ。残弾はＵＳＰ４５二丁に装填されている弾倉（マガジン）のなかにある計１

３発しかなかった。これでここから出られる。自由になれる。そう思いながら地下通路の出口に走る。

その時この研究施設がいきなり爆発した。

どれくらい時間がたったのだろう。少年は朦朧とする意識を無理やり戻し身体を起こした。

何が起きたんだ・・・

少年は周りを見渡すと辺り一面瓦礫だらけで地下通路の特徴的な照明は付いてなく、くすぶっていた。今まで走ってきた通路は瓦礫で塞がれていて後戻りできなかった。

傷だらけの身体を起こし、出口に向かう。さっきまで開いていた出口に分厚いシャッターが降りていた。多分爆発の衝撃でシャッターが降りたのだろう。Ｃ４爆弾（プラスチック爆弾）でも壊せなさそうなこのシャッターに４５ＡＣＰ弾なんか効くわけがない。仕方なしに能力を使うことにした。

演算を開始し、手のひらにエネルギーの塊を創造する。すると手のひらからエネルギーの塊のようなものが現れる。「くっ・・・・・ぐうっ・・・」演算による脳の激痛に耐えながらエネルギーの塊を

シャッターへ投げつける。すると分厚いシャッターが爆発し人1人通れるほどの穴が空いた。「はぁ・・・はぁ・・・はぁ」あれだけ長い地下通路を走っても息を乱さなかった少年は今能力を使うことにより、今まで溜めてきた疲労がドッと押し寄せてきたのである。疲れた身体をなんとか動かし少年は外にでるのであった。

外は至る所に火の粉が発っていた。安全な所を探そうとするとふと頬になにかべっとり付いているのがわかった。
血である。どうやら頭に切り傷のようなものから出ているらしい。傷が残るな・・・いやだな・・・と考えていたら急に眩暈を起こし倒れてしまった。起きあがろうとするが起き上がれない。
もうだめなのかな・・・・・・死ぬのかな・・・・・・普通に生きたかった・・・・・・友達といっぱい遊んで、いっぱい勉強して、いっぱい笑って、いっぱい泣いて、いっぱい喜んで・・・悔しいよ、悲しいよ、どうして誰もいなくなったの、どうしてみんな一人にしたの、・・・・・・・・・・・・・・・誰か・・・誰か助けてよ。
自然と涙かが出てきたいまいる現状は小学生くらいの少年にはきつすぎた。

するとふとヘリのローター音が聞こえてきた。しかしその音は大きくない音である。多分学園都市の技術が使われたヘリなのだろう。少年の居場所がわかるのだろう。中型輸送ヘリと思われるヘリは近くの駐車場に留まり、中から人が出てきた。彼らは「大丈夫か！！」とさけびながら少年に駆け寄ってきた。彼らはすぐさま応急処置に取り掛かった。怯えている少年に一人が「大丈夫だ私たちは君の味方だ！君を助けに来た。この研究員達みたいにはしない。だから安心してくれ、信じてくれ、私たちが君を守る。」

その言葉を聞いて驚きまた少年は涙を流した。この研究所ではそのような言葉を聞いたことなかったからだ。

そして意識手放した。

自分を助けたものの手を握り締め「ありがとう。」と呟いて。

《ｚｅｒｏ》　物語の始まり（後書き）

誤字脱字感想意見等大募集中（＊（　▽（　＊）でも批判的なことはいやです。

第０話　〈プロローグ〉

学園都市

東京西部に広がり、人口約２３０万人〈その内約八割が学生〉の高い塀で囲まれた総面積は東京都の約3分の1であり、あらゆる教育機関・研究機関が集合した円形の完全独立教育機関である。
建前では日本の一都市であるがその実態は独立国家であり、例えば学園都市は独自の軍事力〈建前は自衛兵器〉をもっていたり、外国の外交官と会ったりしている。また学園都市のトップとも言える〈統括理事会〉が学園都市の行政・立法司法を取り仕切っている。

学園都市では異常に科学が発達している。外（学園都市の外部）と比べると技術レベルは２～３０年以上違うと言われている。
その科学を使い、発達したものがある。それが

〈超能力〉

学園都市では学校の時間割（カリキュラム）に能力開発を組み込み、日夜超能力の研究に取り組んでいる。
超能力を得るためにまず脳の開発〈例えば、薬物投与・催眠術・脳への電気刺激など〉をする。この処置をした状態ですでに何かしら能力を持っていることになる。
能力はレベル別に分けられ、それぞれ無能力（レベル１）～超能力（レベル５）までである。

また能力のレベルの強さは以下の通りである。

無能力（レベル１）
効果が薄いもしくは測定不能

低能力（レベル２）
スプーンを曲げられる程度の能力で日常ではあまり役にたたない

強能力（レベル３）
日常生活で便利と評価され始めるが、実戦での起用や先端科学技術としての応用にはまだ至らない。

大能力（レベル４）
学園都市外部の現代科学技術を超える力で軍隊において戦術的価値が得られるほどの力

超能力（レベル５）
一人で軍隊とも対等に戦える程の力で学園都市でも七人しかいない

また学園都市には警備員（アンチスキル）と風紀委員（ジャッジメント）という２つの治安維持組織があ

る。警備員は学園都市の教員で構成されていて、暴走した能力者を取り押さえるためにかなり強力な装備を持っている。
風紀委員は警備員とは違って、生徒（能力者）によって構成されている。風紀委員は「子供を危険にさらすわけにはいかない。」「危険を蹴散らすだけの力を子供に持たせない。」という理由から重大な任務にもつかず、重装備も持たない。また風紀委員になるには９枚の契約書を書き、１３種の適性試験に合格し、４ヶ月の研修を受けなければならない。

〈学園都市〉

それは科学が発達し、超能力をオカルトから現実にさせた学生の街なのである。

朝だ・・・。多分清々しい朝だ。・・・・・。世間からしてみればな。自分からしてみれば・・・きてほしくない朝だ。
おっと自己紹介がまだだったな。俺の名前は〈小野寺翔太〉親しい奴からは〈おっちゃん〉〈しょうちゃん〉と呼ばれている。ちなみに今は高一だ。身長は１７６?体重は６３キロだ。というわけで自己紹介はこのくらいにしておいて。なんできてほしくない朝かと言うと、

鬼が来るんだよ・・・。

実はその鬼はいつもは大人しく、優しい高校生なのだ。それに美人。だが約束（特に俺と交わした約束。例えば、夜俺が奢るとか）を破ってしまうと何故かバーサーカーモードになってしまうのだ。

説明している間に来られてはまずいので、速く学校の準備をしないと。
ちなみにこのやりとりで解ったと思うが、約束を昨日破ってしまった。とゆうか破った。昨日一緒に食事をする予定だったのだが、用事で行けなかったのである。そのこと昨夜メールで知らせたはずだが、どうやらメールを見ず、ずっと集合場所で待っていたらしい・・・。明らかにあちらの不手際だと思うのだが、先程メールを見ると呪いのメールとも言えるものが１０通着ていた。それで冒頭のきてほしくない朝になったわけだ。

すぐに新しいＴシャツに着替える。そして学校指定の白シャツを着てズボンを履く。そして机の上にある既にホルスターに入っている拳銃を両腰に装備し、俺専用にオーダーメイドで作られたウェストポーチの装備を確認し、身体に巻きつける。そして白いタオルを大

工がかぶっているように頭に巻きつけ、学生鞄を持ち、素早くベランダに出て、ロープをベランダの柵に取り付る。ロープの確認作業をしようとすると、ドアのチャイムらしき音と誰かがドアを叩きながら何か言っているような音がするが気のせいだろう・・・。気のせいに違いない。ロープを垂らし、ロープを掴む。ちなみにここは１０階。まぁ落ちたら骨折はするな。そして能力を応用しながら徐々に降りていった。

普通(ノーマル)？のようで異常(アブノーマル)？
異常(アブノーマル)？のようで普通(ノーマル)？な生活それが俺小野寺翔太の日常生活。

第０話　〈プロローグ〉（後書き）

誤字脱字意見質問感想よろしくお願いします。

第1話

場所《第7学区》
時刻《朝7時13分》
視点《小野寺翔太》

どうも小野寺くんです。〈朝の鬼〉こと風紀委員の同僚から逃げ切り解放感いっぱいです。

今ものすごく幸せです（変態）

と俺は呑気に歩いていた

〈ほんの数十分前は・・・〉

「で、逃げた理由聞かしてくれルゥ？」

彼女は〈参道千尋（サンドウチヒロ）〉俺と同じ風紀委員で同じ第一三六支部に所属している。能力はレベル４の〈速度増加（クイックレンジャー）〉自分の身体能力や触れているものの速度を上げる能力
例えば、走る速度を上げたり、物を投げる速度を上げてめっちゃ遠くにボールをなげたりとまぁ体力テストでオールＡ評価採れそうな能力なのだ。しかも当本人も鍛えていて風紀委員の中でも近接格闘（ＣｌｏｓｅＱｕａｒｔｅｒｓＣｏｍｂａｔ略してＣＱＣ）訓練では必ず上位十名に入る程で教官を倒した数少ない人の１人だ（一応まぁ俺も倒した）
で今どこにいるかという・・・

ドゴッッ！バチッバチッ！って危ネェ！
「・・・ネェ、話・・・、聞いてる？」

・・・と今はとあるファミレスに着ている・・・あっ今の音は隣に座っている参道さんが持っているスタンロッド（ガン）（某金属歯車固体平和歩く人に出てくるスタンロッド）をテーブルに叩きつけた音・・・
「い、いい加減に機嫌をナオシテクレヨ。」
「ふんっ。またやったら首狩るから。」

そう言って店員さんに特大ジャンボウルトラパフェを頼む鬼（千尋）さん。

こうして朝方から俺の野口さんが２人消えていった。

〈１０分後〉

「プハァ～～幸せ。」

特大ジャンボウルトラパフェをわずか１０分で平らげ、幸福感でイッパイの参堂さん。

対する俺はパフェが２３００円かかったことに絶望感イッパイの俺。

「そういえば。俺のラケットとライフル。メンテに出してくれた？」

「ラケットとライフル？

あぁ、出したわよ。メンテは5日かかるって。」

そういってドリンクバーのコーラを飲む。

ラケットとライフルというのはその名の通り、ラケットとライフル。ラケットは俺が能力を使う時に一緒に使う道具だ。ライフルは俺が暴走能力者などを遠距離狙撃するための道具。風紀委員は基本的には武器の使用は禁止されている。「危ないものは子供には持たせない」ということらしい。でも一部で許可されることがある。それが〈暴走能力者等への遠距離狙撃による沈静化〉だ。ただし、弾は特殊な非殺傷弾だし、本格的な狙撃銃（スナイパーライフル）は採用していない。

一応俺のライフルはアメリカ軍のＭ４Ａ１カービンの先進改良型であるＨＫ４１６の民間向けモデルで連射ができないＭＲ５５６だ。正直ＨＫ４１６の方がいいが、上のお偉いさんが認めてくれなかった。

「じゃあ俺先に行くわ。支部でしなくちゃならない仕事あるし。」

「・・・食い逃げするつもり。」

ギロっと俺を見る参堂さん。

コワ

「する訳ないだろう。正直懲りたよ。」

そう言うと「そっか」とだけ言い、伝票を渡してきた。

代金を払い、出る前にトイレに行こうと思い、トイレに向かうと、３人組の男とすれ違った。

嫌な気配がするなと思い、一旦トイレに入る。

携帯で参堂に電話をかける

・・・

・・・・・・

・・・・・・・・・ピッ

『まさかあなたがこんなに近いのに電話してくるとは思わなかった

わ。しかもトイレから？変態なの？ふざけてんの？』

かなり不機嫌ですね。

「不機嫌になるのは分かるが今はそれどころじゃない。トイ『トイレから出てきた3人組。3人ともキャップを被っていて、1人はタンクトップで1人はごっついやつ。あと1人は・・・へにゃっとしてるやつでしょ。』・・・そう危険な匂いプンプンしない？」

そう言ってニヤける俺。

『一応準備す『パァーン！』『お前ら動くんじゃねぇ！』・・・訂正動くわよ。』

「了解待機して。バレないように。」

そして俺は準備し始めた。

〈ｓｉｄｅ強盗〉

俺達の計画は完璧だった。

わざわざ朝方の時間帯を狙い、学生達が少ないここをあえて狙った。

警備員も出勤しているころでそう早く来れないだろう。

俺達は完璧だ。

「一応トイレと厨房を隈無く探せ。誰かに通報をされたらこまるからな。」

俺は2人を厨房とトイレに向かわせ、俺は店員と学生とコックの計11人を見張る。

すると「バンッ」という何かをぶつけた音がした。

「おい安藤！どうした！何かあったのか！」

そう俺が言うと、1人のガキが出てきた。

ズボンを下ろし、パンツ丸見えで、トイレットペーパーの芯を持ちながら。

「すみませ～ん。トイレの紙・・・てこれどうゆう状況？」

ガキが唖然としている。

「まさか・・・これ立てこもり？・・・ヤベェ！すげーリアル立てこもりだ。初めて見た。」

皆が唖然としている。この緊迫した状況が・・・1分前の静かな状況が・・・このガキたった1人に壊された。

「写～メ♪写～メ♪立てこもり写～メ♪」

そういって携帯を取り出す。

「う、動くな！」

金縛りに解けたのか厨房を捜索していた藤堂が拳銃をガキに向ける。

俺も素早く拳銃の銃口をガキに向ける。

「携帯を使うな！サッサとこっちに渡せ！」

「え～仕方がないか。ていうかトイレットペーパーくれない？拭く前に出てきちゃってさ～」

「お前トイレに行った奴はどうした。」

「トイレに来た奴～？あぁあの従業員？『スミマセンここの従業員ですがちょっとよろしいでしょうか。』と言ってきて、無視したらしつこくてしつこくて。ドアを勢いよく開けて怒鳴ってやろうと思って開けたら、吹っ飛んじゃった。テヘ♪」

「き、貴様ー！」

そう言ってガキに向かっていく藤堂。

「あ！そうだ。携帯だったね携帯。それっ！」

そして自分の携帯をポーンと手首を使ってスナップを利かし、下投げで投げるガキ

普通なら、真っ直ぐに近い浅い山なりの軌道を携帯が描くはずだっ

た。

だが、その携帯は“音速位の速度を出していた”

俺と同じように考えていた藤堂は身構えておらず、モロに音速クラスの携帯を腹に食らい、５メートル程吹っ飛び、テーブルに打ちつけられた。

“能力者”

その言葉が頭に浮かんだ。

〈ｓｉｄｅ小野寺翔太〉

立てこもりＡはドアで立てこもりＢは携帯で倒した俺は隙を見せずに、すぐさまズボンをはき、残りの立てこもりＣに肉薄した。

立てこもりＣは筋肉質の男で能力者らしかった。

俺が来ると分かるや否や、隠し持っていたサバイバルナイフを左手で取り出し、右手の拳銃で発砲してきた。

俺は能力を使い、銃弾を当たる寸前で止める。

そして俺のズボンのベルトを居合い切りのように引き抜き、そのまま拳銃を吹き飛ばす。

「ッ！この！ガキがぁー！」

そう言いながらサバイバルを突きつけてくる。

それをひらりと右にかわし、サバイバルナイフを持っている立てこもりＣの左手の手の甲に自分の肘を打ちつけ、ナイフを落とさせる。

落としたナイフを足で滑らせ、ナイフを遠くにやる。そのついでに周りを見ると、千尋が店員や客を誘導しているのが見えた。
どうやら大丈夫そうだ。
すると立てこもりCが大きな左腕を振りかぶってくる。それを能力で止め、動きが止まった瞬間に鳩尾に拳を叩き込む。そして止まっている左腕を担ぎ上げ、きれいな一本背負いをキメた。

立てこもりCが目を回してるいのを確認し、手錠を掛ける。同様に残り2人にも手錠を掛ける。すると警備員の車両のサイレンの音が聞こえてきた。
・・・このあとの事情聴取受けずらいなーと思いながらも外に出た。

＊＊＊＊＊＊

立てこもり犯？3人が警備員の車両に乗り込み、扉が閉められ、サイレンを鳴らしながら発進していった。
俺がその車両達を見ていると
「相変わらずね〈森羅万象（ホーリーエナジー）〉」
どうやら警備員にの事情聴取が終わったらしい千尋が来た。
「その呼び名で呼ぶなよ。俺の名前じゃないんだし。」

俺が抗議すると
「いいじゃない。名前みたいなものでしょうに。」
といってあしらった。

〈森羅万象（ホーリーエナジー）〉

それが俺の能力。
あらゆるエネルギーが世の中にあるが、それを操るのが俺の能力。
例えば熱エネルギー、力学的エネルギー、電気エネルギーなどなど。

さっき使っていたエネルギーは主に運動エネルギー。
ドアを開く運動エネルギーを増加させ、ドアの前にいた立てこもりAを撃退。
携帯を投げる時の運動エネルギーをこれもまた増加させ、携帯の投げる速度を速くし、立てこもりBを撃沈。
立てこもりCの時は、自分の運動エネルギーを利用。

この様に、この能力を使えば、軽くドアを開けただけなのにドアを素早く開けたり。軽く投げただけで、音速クラスの球速投げられたり出来るのだ。

「ところで今からどうする。」

俺が聞くと千尋は
「うーん暇だし支部に行くか。」
「暇ってなぁ。」
「さあ行くぞ。」
「そうして俺は連行されていった。」

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n8030u/

とある科学の森羅万象〈ホーリーエナジー〉

2011年10月9日09時08分発行